インドネシアの自然保護

高畑　滋
（農林水産庁・草地計画部造成計画研究室長）

　豊かな自然に恵まれたインドネシアでも、急激な近代化のために環境破壊が深刻になってきています。七〇〇万ともいわれる膨大な人口をかかえるジャカルタでは、下水施設の不備もあって川という川はすべてゴミの川です。熱帯のスコールは町中を水洗トイレにしたようで、あらゆるものを押し流しているのです。スコールのおかげで衛生状態を保っているとさえいわれていましたが、都市人口が巨大になると水洗能力にも限界があります。ジャカルタの海産物は危険で食べられないといわれますが、インドネシアのテナガエビの生産は大きく、日本にも相当量輸出されています。水銀中毒はすでに報告されていますから汚染物質をきちんとチェックする必要がありましょう。

　海の汚染は観光面でも問題になっており、高級リゾート地として知られるバリ島のサヌール海岸でも、満潮のときにはゴミやら便やら廃油ボールやら砂浜にまで押しよせてきて台なしです。美しいサンゴ礁の島がたくさんあることで知られるジャカルタ沖のプウラオスリブは、今、島ごと観光開発する例が増えています。日本から五日間十五万円という往復運賃よりも安いパック旅行でマリンスポーツや釣りを楽しむ若者に人気があるためです。沖縄白保の北限アオサンゴを空港建設でつぶしてしまおうというのも無茶な話ですが、サンゴ礁の島がたくさんあるからといって観光開発のためにつぶしてよいわけはありません。サンゴ礁は非常にもろいもので、観光客が触れただけでも崩れるものがあります。サンゴ礁は静かに見るだけが許されるもので、無神経な観光客を大量に集めるレジャーランドには向きません。

　インドネシアは石油や木材の価格低迷で財政難なので、観光開発を大いにやろうという意気ごみですが、美しい自然が魅力の観光地を台なしにしてしまったら後々困ることでしょう。

　海だけでなく、陸地の奥深くまで熱帯雨林の破壊がすすんでいます。この地で木を伐るなとか農地開発をするなといっても通る状況ではありませんが少なくともこの地の安定した生態系である熱帯雨林を地域生態系の基本としておさえなければいけません。熱帯雨林としての性格を逸脱しない範囲でしか近代的農林業が入りこめないものだと銘記すべきです。

　このことに気がついて自然保護運動を起しているグループもあり、ENVIRONESIA といってインドネシアン・エンバイロメンタル・フォーラムという機関誌を出しています。日本でもアジアの熱帯林を考える会（東京）とか熱帯雨林研究会（筑波）などが活動しています。ボルネオ島マレーシア・サラワク州では、生活の根拠としている熱帯雨林の伐採に反対している住民の運動があって、林道封鎖など直接行動に出ている例もありますが、カリマンタンのほうではそのような動きは聞きませんでした。もっとも私達の耳に届かなかっただけで、ボルネオの奥地では何が行われているかわからないといったほうがよいでしょう。炭鉱で働く人達が労働条件改善のために要求を出したところ、不穏分子だといって殺されてしまったという話を聞きました。奥地の部族が伝統的な生活を守って生きていくか、近代化の波に流されて労働者になって森から出てくるのかは大変むずかしい問題です。どちらの途をとるにしろ、熱帯雨林がなくなることは自分達の環境を危いものにするばかりでなく、地球環境全体にまで影響を及ぼす重大事だということを、住民みずからが気がつかなければ自然保護運動は起らないと思います。そういう意味では自然保護運動は民主社会から出てくるものです。知床から熱帯ジャングルへ、国際化した運動は連帯を呼びかけています。